

季節と祭りー自然及び社会環境の視点からの考察

後 藤 信*

A Study from Natural & Social-environmental Perspectives

Makoto Goto*

With the fall of Old Japan in 1945, Japanese National Holidays derived from the country's long tradition and history were either replaced or abolished completely. The occupying force, the USA, compelled Japan to change the names of these holidays, which meant that Japan, under the persistent pressure of the USA's absolute policy, had to be subservient to the Uncle Sam's patronizing advice of cultural transformation to make a new start as a demilitarized, peace-oriented country.

These demands included not only the rewriting of the National Constitution but also of the history of Japan, especially the pre-historic period in which abundant ethnic myths have represented national identity as that of an agricultural tribe. Although in reality it seems hard for us to expel the still-occupying foreign military forces from the air base of our country, we would at least like to regain the cultural independence that we have enjoyed in our long history. By reexamining the character of national holidays in the past, we can, ironically, perceive a culture analogous to ours in the West before their coming into Christendom. In pagan days, people all over the world worshipped the order of nature. Traditions such as adoring trees and woods and the preservation of what they had in the past have helped to keep human being from destroying their environment. To know our past is to foretell our future. I hope my small study in this report will contribute in some way to the social-environmental studies of Kure University.

Key Words (キーワード)

Hogmany (大晦日の祝い), Halloween (ハローウィーン), Christmas tree (クリスマスツリー), Paganism (異教徒の習俗), EcoPaganism (自然崇拝と環境保護)

はじめに

我が国においては桜前線の移動を一つをとってみても琉球と北海道北端とは開花の時期が二ヶ月近くのずれがある。この事からも察せられるように、地理上、緯度の点から見ての日本列島は縦

に長く延びている特性を持つ。しかしながらそれでも尚、各地域共におしなべて春夏秋冬の四季の変化には恵まれている。季節に対する人々の姿勢も鷹揚である。時折、台風や地震の被害に見舞われることはあっても、自然に向かって敵対視し、あらがうという姿勢は余り見られない。寧ろ親愛

*呉大学社会情報学部 (Faculty of Social Information Science, Kure University)

の情を寄せそれぞれの季節を抱え込み、慈しむといった態度であるとよく言われている。

俳句にも季語が必ずあり、そして又、小倉百人一首に収められた歌詞をみてもその詠まれた季節が一つに偏ることなく広く四季に拡がっている事に気付く。

昔から日本人は季節が見せるその表情を心に受け止めて、刻み impress 込む。そして詩歌管弦、絵画工芸、茶・華道、舞踊、服飾、園芸造園といった幅広い芸術分野の中で作品 art, work, として四季の特徴を、季節と人間生活の調和した姿を、それぞれ美しく表現 express してきている。

吉田兼好は徒然草の第百三十七段で「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは」。そして又、「…咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見所多けれ…」と述べている。

季節の移りゆく中で人間は自然美がその優美な姿を飾り立てて示す high time に特にこだわらず、すべての時に、自然に注目し、鑑賞をも行うべきであると説いている。このように日本という風土の中で人々は四季を通して生命の移ろいから様々の感動を受け、想像力を接ぎ木とし、それを高度な芸術表現に磨き上げる感性を培ってきたのである。又、表現と言えば、農耕などに見られるように、人々が生活と自然との関わりの中で、自然と如何に向かい合い、自然を利用し、そして田植えに当たっては作物の無事生育を願って神への祈りを表し、そして収穫の際にはその恵みに対して感謝を表現してきた。それは儀式としての神事や祭礼などの中に残されている。

それらは他の国々とのどのように異なっているのだろうか。祝祭暦は land と四季との関わり合いや宗教上、政治上の出来事との関連を通して生まれる。祝祭暦の中にはその国の現国王の生誕日、独立や革命の記念日、他国との戦争における戦勝記念日や他国の支配からの解放記念日なども含まれている。暦における公休日、特に日本における国民の祝日の意味をここで考えてみたい。暦に目を通すと祝祭日は赤文字で記されている事に気付く。祝日は英語では holiday である。その意味は

文字通り holy+day “聖日”であり、宗教色の強い語である。黒文字となっている他の日々との単なる対比のためにこの日の文字が赤となっている訳ではない。それはキリスト教の伝道の途上で殉教した諸聖人が流した血の色を表したものである。英語では red-letter-day と呼ばれる。

旧約聖書は「天地創造」の完了後、神が安息日を設けたとしている。その伝統に基づいて日曜日を安息の日 Sabbath とする欧米キリスト教国とは異なって日本の日曜日は宗教性とは無関係に暦のシステムの輸入の結果として生まれているに過ぎない。西欧化によって国民の祝日が暦の上で赤文字となっていることの意味に関心を払う日本人は少ないのも同様である。¹⁾

ところで、当地呉市を代表する神社の秋季大祭はその秋に収穫された稲の初穂を神の祭壇に捧げる儀式である「神嘗祭」の10月17日であった。戦後はこの日が祝日から外されたため現在では10月10日の体育の日へとシフトされている。現代の若い人達にとっては何故 10月10日の“東京オリンピック”記念日が神社の秋季大祭となっているのか。10月10日を体育行事として利用するならいざ知らず、神道の神社の祭りとしては、一体、両者にどういう繋がりを持つのかを疑問に思う人もあろう。或いは又、4月3日、戦前は「神武天皇祭」で国民の祝日となっていた。その日を特定してお花見の日と称し、桜の開花状況や当日の天候とは無関係に一斉に野山に出掛け、弁当を揚げ、酒宴を張る風習が当地呉及び芸南地方にはあった。今日ではそれぞれがその年の桜の満開日と好天に合わせて花見を行うようになり、4月3日の祝祭日の特徴は失われてしまった。又、戦前は呉市民にとって年間を通して最大の祝日、晩春の5月27日は「海軍記念日」であった。当時軍港都市であった呉市は当日、様々なイベントを持ち、賑わいを見せていた。その日は東郷提督の率いる日本海軍が帝政ロシアのバルチック艦隊を破った記念の日であった。呉二河公園で開かれていた学童の手で作られた模型飛行機の飛行テスト大会なども華やかな一日の出来事として幼い日を彩る鮮やかな思

い出となっている。然しその日は祝祭日として廃止されただけでなく、国民の、そして呉市民各々の記憶ノートからも抹消されてしまったようである。

一世紀前、日本は急速な文明開化、西欧化を行い、無名だった極東の一島国を世界史の中に登場させた。そこを出発点として、ともかくも、今日の日本があるのは誰しも認めざるを得ない。その時代の総合的なシンボルとしての明治天皇の誕生日を記念した「明治節」が歴史の一里塚を示す道標として菊薫る11月3日に設置されていた。その11月3日は「文化の日」と改称された。そして又、11月23日の「新嘗祭」は祝祭日として歴史的な背景の全く異なる米国の Thanksgiving Day の翻訳語にはかならない「勤労感謝の日」という新たな名称の日となった。

ところでロンドンには有名なトラファルガー広場がある。トラファルガー海戦の戦勝を記念した広場である。ネルソン提督の記念塔が空に向かって高く聳え、その彫像は広場を見下ろしている。パリ北駅を発したユーロスターは英仏海底トンネルを通った後、ロンドンのウオータールー駅に到着する。そして又、鉄道ターミナルとしてアウステルリッツと言う名の駅がパリにはある。それぞれ両国の駅名には所在地とは無関係な外国の地名がつけられている。アウステルリッツは嘗てフランスを率いるナポレオン軍が戦勝し、そしてウオータールーとは英軍がナポレオン軍を打ち破った戦いの行われた地名である。「時間」も「歴史」も連続しているのである。

日本では1945年、つまり、昭和20年8月15日をゼロ時 Stunde Null としてその翌日からが第一日として新生日本の歴史が始まったと考える人が多い。戦前期にあった過去はすべて歴史から消去すべき絶対悪と見なされがちである。8月6日の原爆投下の日や8月15日の終戦記念日の意味が強調されることはあっても、それ以外で、戦前にあった記念日や伝統文化に基づく祝祭儀礼の意味をそれなりの評価をもって取り上げようとしたり、或いは、世界的な視野でそれらを相対化した上で

過去の記録を伝えようとすれば、即、ミリタリストと短絡的に断定されて、悪の烙印を押される場合が多いのも事実である。その一方で、国際社会に目を向けると、民族の文化上の identity の尊重とか違いを認めあう事が共生の条件であるとかもしやかに叫ばれながら、今日でも自国の持つ価値観が普遍的な standard であるとしてそれを全世界に適用させようとする勢力があるのも事実である。特にイスラム文化圏への外圧は目を惹く。

戦前を生きた人達が今、その残り少なくなった人生において「語り部」として自らの生きた時代の経験を素直に次の世代へ語り継ぐことは必要であろう。つまり戦前、戦後の時代を跨いで生きてきた世代の者が祝祭のありようや、その意味を通して「途絶した時間」の架け橋の役割を果たしておくことも大切と考える。

ここでは季節、特に新年に焦点を当てて欧米の祝祭の中に生きる今と昔の姿を調べ、得られた資料に基づいて、時間の継続性、非継続性を指摘する。そして西欧と日本との類似点や相違点を対照させる。東西世界は勿論、文明史上の歴史区分となっている境をも超えて人間と祭りの関わり合いの根源を覗いてみる。それによって環境問題を含め、今日我々が抱える諸課題を解決する手懸かりの一つが入手出来ればと思ったのが今回の執筆の動機である。

英単語の意味に見られる暦の始まり

日本語の「日」を辞書で調べると太陽・日輪又は太陽の光・熱と言った説明語句が現れてくる。英語の“day”はCODに拠れば

- (1) Time while the sun is above horizon including twilights
- (2) Twenty-four hours from noon; from midnight となっている。

古代の人々は天空を眺めて day とは彼等が終日、日差しを受けている時間帯、日の出から日没迄であると最初に考えた。そして正午から次の正午まで、そして現在採り入れられている深夜から

次の深夜までの一昼夜の時間上の単位を示す語となっていた事が分かる。hallo/good-bye の意味として使われる good day という成句が、人々の挨拶の言葉として、正午を過ぎての時ではなく、初夏の夜明け後間もない早朝の時刻に出会った人々の間で用いられている英語の用例を見た事がある。これは day が太陽との密接な関連を物語っている例証と云えよう。次の段階では、日の出から昼間と暗闇の夜を含めて次の日の出までの一昼夜を一日とする着想に至る過程が想像される。冬の間、日照時間の短い北欧では夜の数を算定して時間の単位とした。ゲルマン系の英単語の中にその名残が見られる。

sennight : seven night 一週間, fortnight : fourteen night 二週間。ケルト系言語においても同様の言い方がある。ウエールズ語の例を見てみよう。wyth (eight) + nos (night) = wythnos (week) そして pythef (fifteen) + nos (night) = pythefnos (fortnight)

英語の day は語源的にはゲルマン系の語で、独語では tag, 蘭語及びデンマーク語スウェーデン語では dag となる。その意味は“燃える, 熱, 夏”などが記されていて太陽が照っている時を表していた。次に「月」の場合をみよう。

日本語の辞書には月という語の説明として

- (1) とくに秋の澄んだ月をいう語 (2) 月がまったく見えない夜から次の見えない夜までの期間をいう。
(3) 一ヶ月の称 (4) 月のもの, 月経

旺文社 古語辞典より

などと記されている。中秋の名月を愛でる習慣は平安前期に中国より伝来したと云われる。英語では中秋の名月 harvest moon という。秋分に老いかけた日光と収穫の時を記念した Mabon の祭事を行っていたのはケルト民族であった。秋分のあとに来る満月は葡萄の収穫期の月と云うことで Wine Moon とか Harvest Moon と云われるようになる。アイスランドでは秋分の直後に訪れる満月を Winter Full-Moon と呼んでその夜に宴を開いている。ゲルマン系の語である英語の moon と month, 独語の Mond と Monat はそれ

ぞれの語の強変化や弱変化があるものの、同根の語であることが察せられる。

これは天体の「月」と、時間単位としての「月」が同じ語である日本語の場合と似ている。ラテン語系、ロマンス諸語の場合、天体の moon と、時間単位の month は別の語を用いている。moon は仏語では lune が当てられている。伊語では luna となる。これは英語の light 月の光と同根の語である。luster 光沢, 光彩, や illustrate 輝かせる, 明らかにする, 例証するなどの語にもその意味が見られる。他方, monthの方は mois (仏語), mese (伊語) などとなっている。monthの語源は印欧語の menes-で, meは英語の measureと同根の語である。つまり, 満月から満月の期間の「測定」という意味にその端を発している。menstrual「月経の」の語源は“毎月の”の意味を持つラテン語である。mensurableの英語の意味は「測定出来る」である。そして「月経」はmenstruationで, 「計量, 測定」はmensurationとなる。

次に季節 seasonを見てみよう。seasonはラテン系の語である。仏語でsaisonと綴られる。語源は“種を蒔く, 植え付け”をするである。英語のseed, semen, 独語のSame, そして日本語としても知られるSamenなどとも同根の語である。種付けから意味が発展して生育成熟の意味も生まれた。“旬”という日本語が訳語として相応しい場合もある。一年を4区分して時間の単位としたのは後の事である

春夏秋冬の語源はどうであろうか英語のspringは名詞としては“春”の他, “泉”, “バネ”などの意味が, そして動詞として“跳ぶ, はねる”の意味がある。これらはすべて同根である。発芽運動が, そして湧き水が, 地表の殻を打ち破ってバネのような弾みをもって地上の躍り出る運動とその時「春」を指している。朝跳び上がって起床することから古くは“早朝”とか, “初期・第一段階”の意味にも用いられた。独語のSpringは湧き水, 泉である。²⁾

そして春を表す独語はFrühlingである。früh

は 英語の early に相当する意味の語であり、遅い季節、つまり、Spätling 秋と対照をなす語である。

夏 summer はゲルマン系の語で、ドイツ語・デンマーク語では sommer, 蘭語では zomer, スウェーデン語では sommar となっている。語源的な意味は“温暖な半年”である。

秋 autumn はラテン系の語である。そのラテン語は autummus, 仏語では automne となる。その意味は maturing “成熟”である。独語の秋は Herbst である。この語は英語の harvest と同根の語である。収穫、取り入れ、果実の採取の意味に使われている。古い用法の英語では現代独語におけるように、作物の取り入れの「行為」と同じく、取り入れの「時」である“秋”を表していた。又、秋を表す語として米語の fall が日本では知られている。これは本来は“落ちる”の意味を持つゲルマン系の語で、独語では fallen として使われている。何も新しい用法の語ではなく最初の米国への移住者 Pilgrim Fathers 以前の英本国では“落葉”の時季の意味で用いられていた。

冬 winter は独語も同じ綴りの語である。³⁾ winter の語源は the wet season 又は the white season で“寒冷そして雪の白”を表している。序でながらオーストリアの首都ウィーン Wien, Vienna の意味は白い都市である。winter の形容詞である wintry はラテン系の英語では hibernal となる。hibernation “冬眠”の場合と同様にこれは仏語と同形の語である。語源は厳しい冬の間、生き抜くに相応しい土地で過ごすの意味である。これとは逆に、英語の estivate は動物の“夏眠”, そして人間の避暑を行う行為 estivation を表わす。仏語の場合, estival は“夏の”の意味となる。更に避暑客の意味を表す estivant という語もある。

これらの語の意味からも次のような事が分かる。古代の人々は時季による日照時間の長さや日差しの強さ、つまり、熱とか暑さとを持つ時に関心を向けた。長い期間の時間単位に注目した結果、種付けや収穫、そして遊牧のための移動など人間の

生活と関わりに応用出来る季節という概念を突き止めた。やがてそれは冬至、春分、夏至、秋分という時の区分を軸にして成り立つ四季の暦を構成する一年と言う時の単位を持つまでに至ったものと思われる。即ち、太陽が黄道上の春分点を発して再びその春分点に回帰する一年を単位とする太陽暦を作り上げた。

また一方で月面の相の変化を観察し、その周期を測定し、それを基にした太陰暦を生み出した。そして太陰暦による「月」および、太陽暦の「年」という時間単位を巧く組み合わせ、バビロニア暦とエジプト暦とを巧みに合体させて Julian Calendar を作り上げた。46 AD それは今日の暦の基礎をなしている。更に16世紀末にローマ法王グレゴリー13世の手によって改良が加えられたものが Gregorian calendar として西欧各国で採用されて今日に至っている。⁴⁾

3月と年の始まり

ところで一年の始めは何時が適当なのであろうか。年の始めを1月1日と定め実施しているのは、今日多くの国々においてのことである。然し公式の暦とは別に“春節”と称して太陰暦による旧正月 Lunar New Year's Day の慣わしに従って2月に実質的な新年を祝っている民族もある。バビロニアでは 2000 BC に早くも3月23日に新年を祝っていたと伝えられている。1月1日に始まる新年は天文学上、或いは農作上の季節区分として特に意味を持つものではない。ジュリアスシーザー以前のローマ暦では新年は3月の1日をもって始まっていた。暦と云う意味を表す calendar カレンダーという英語は古代ローマ時代の金貸し業者の出納簿 calendarium に語源を由来している。当時の支払い期限の日は月齢による毎月の1日 calendae であった。

現在9月～12月までを表す英語は September～December である。然し言葉の意味ではそれらが7月から10月となっている事からも3月が一年の starting point である事が直ぐに察せら

れよう。即ち、毎年最初の月、第1月日は Martius [英 March, 独 Marz, 仏 mars], 2月 は Aprilis [英・独 April, 仏 avril], 3月 は Maius [英 May, 独 Mai, 仏 mai], 4月 は Junius を [英 June, 独 Juni, 仏 juin], 5月 は 数字の5を表す Quintilis, 6月 は6を表す Sextilis であった。7月以後は今と同じである。7月 は7を表す September, 8月 は8を表す October, 9月 は9を表す November, 10月 は10を表す December であった。その間の日数の総計は304日で、一年のうちの残る日々は数字も月名も付かない冬の期間となっていた。ローマ国王 Numa Pompilius [715-673BC] が December と March の間に February, January の順で二つの月を挿入したのはのちの事である。January という語は物事の初めと終わりを司る神 Janus に由来している。3月が年の始まりであった当時の2月に January を置いた事は注目に値する。更に、その後450BCに February は現在の位置へと移し換えられたとされている。そして1年の始まりを March から January に移したのは153 BCのことである。

ローマ暦の場合、バビロニア暦以来の慣習に従って現在の3月 March から新年が始まっていた。その理由は何故であろうか。恐らくその時が種蒔きの季節であったという事であろう。March の語源となっている Mars は軍神として知られている。元々は豊穡の大地を司る神であった。尤も当時の戦争が雪解けの季節を待って始められたので軍神であっても良かったと言える。

April の命名の由来は二説ある。一つはこの月がギリシャ神話の女神 Aphrodite に捧げられたからだとするものがその一つである。Aphrodite はローマ神話の Venus に相当する。アフロデイトは多情な女性であり夫以外にも多くの神々と関係を持ち、それぞれの相手との子を出産している。女性の多産と大地の豊穡とのイメージを重ねて春に芽吹く生命の誕生と生育を祈願したものであろう。今一つは英語の“open up”に相当するラテン語の aperire から採られたものとされる。この

季節に大地が open up して植物の生育を可能にするという意味に基づいている。

May は女神 Maia の祭典の月である。Maia は死者を復活させ再生させる女神であった。冬の間、地上を眺めると、植物は枯死状態になっていてその姿を見せない。春になると種子は芽生え、その生命ある姿を地上にあらわす。彼女は農耕の守護神であった。

June は女神 Juno の名前に由来する。Juno は Jupiter の妻であり結婚の守護神である。日本の June 6月 は雨期であり、蒸し暑さを伴う時季である。そのため結婚シーズンには不向きと考えられる。然し最近日本でも6月の挙式を望む花嫁も増えているという。結婚式場がシーズンオフのサービス料金を実施している訳ではない。6月の花嫁 June bride にあやかろうとする縁起担ぎである。一つには東洋の乙女が抱く西欧の習俗へのロマンチックな憧れも手伝っているやも知れぬ。本来これは植物や動物の雄雌、そして成人した人間の男女の交接、生殖と生命の発展を願って Juno 信仰を抱いた昔の人々の心がこのような形の習俗となって結実し、今日も生きているその証であらう。

現在の7月、そして当時の共和制ローマ歴第5番目の月以降、つまり「春」以外の時季には「…月」の名称はなかった。単なる数字の羅列となっていた。現在の7月には Julius Caesar の名にちなんだ July, そして8月にはその甥で帝政ローマの初代皇帝 Augustus Caesar の名前を冠せた August が当てられている。それぞれが当時の5月、6月の数字に代わる名前となって入ったのは後の事である。当時の1月～4月、つまり英語の March から June 迄の期間を単なる数字の列挙ではなく、言葉として使っていたのは意味深い。春と生命の始まり、誕生のイメージを重ねて時間上の節目を強調して設定したものであろう。

ところで現在日本では4月、桜の開花時期に合わせて学年暦をスタートさせている。最近、国際留学やそれに伴う学校での進級や単位認定の問題の不便さから学年度の開始の時期の見直しの問題提起も行われている。然し、一年の始まりを春

に求める人間の心は根深いのある事も見落とし
てはなるまい。

11月と年の始まり

一年の始まりを 11月 1日 と定めていた民族もある。それは古代のケルト民族である。ケルト民族は紀元前には中央ヨーロッパにおいてその勢力を振るっていた。今日でも彼らが居住した足跡はライン河畔を始めオーストリアそして中欧各地に地名として多くその名を留めている。この民族はやがて紀元前後を境とする時期にローマ帝国やゲルマン諸族によって大陸の中央より駆逐されるに至る。混血は見られるものの、現在では主としてフランスの北西部の半島ブルターニュ、英国のコーンウォールやウエールズ、そしてスコットランド及びアイルランドなどのヨーロッパ大陸から見て辺地や島嶼部に定住している。

ケルト族は夏の終わりの意味を持つ Samhain、10月31日を収穫最後の日、牧羊が草をはむ季節の終わりとしてその年の終わりとしたのである。その年の“太陽の季節”夏が終わり日が次第に短くなり、やがて一年が終末を告げる。11月 1日は北緯50°前後の地に棲む彼等の生活にとって長い闇の季節、冬を迎える時である。そして新年が始まるのである。ケルトの人々は一年を二分して季節を持っていた。5月 1日の Beltaine 即ち May Day に始まる光の半年と、11月 1日 Samhain に始まる闇の半年である。それぞれの日を境にして光が闇を圧倒し、又、その逆となる。光は昼間や温暖、熱そして生命の賦与を意味する。一方、闇は夜や寒さと死を意味していた。過ぎ去らんとする年を死と見なし哀悼の気持ちを捧げる。新しい年を生命の誕生と見なし希望をもって迎え入れるのである。冬の期間にはその中間点2月2日に Imbolc が、そして夏の期間の真ん中の8月 1日には Lammas が挿入されてやがてケルトの四季は構成されるに至る。

Samhain が到来すると収穫物は各家庭の倉庫に貯蔵される。牧草地に放牧された牛や羊は集め

られて家畜小屋に入れられる。その一部は屠殺されて冬の間の保存食として蓄えられる。10月31日、Samhain の前夜が来ると人々は最良の農作物と屠殺された家畜を持ち合い、一同が集い、宴を催すのが慣わしであった。日没となり闇が辺りを支配する刻を迎えると、聖なる丘の上では巨大な篝火が焚きあげられる。去り逝く太陽の季節を哀惜し、春の太陽の再訪あるを念じて篝火を焚く。篝火を太陽と見立てての行事であろう。その炎の中には殺された家畜の骨 bone が投げ込まれる。篝火を表す英語の bonfire という語はこの bone-fire に由来するものである。⁵⁾

Thomas Hardy は作品 The Return of the Native の第1章～第3章の中で名文を用いてこの習慣の謂われを描いている。火を焚くという事は寒冷の闇、そして生物の死滅を誘う冬の厳しい自然の定めに向かって生き延びようとする人間が、本能的に行ったプロミシユース的な反逆行為、抵抗活動であると述べている。

Guy Fawkes Day の11月 5日には英国の町や村で篝火が焚かれる。ガイフォックスを模した薬人形が燃やされたり、花火が夜空に打ち上げられたりする。これは宗教改革の結果生じた混乱期に、歴史の流れを元に戻そうとしたカトリック教徒が火薬を用い英国王及び国会議員を殺害しようとした陰謀事件 Gunpowder Plot に由来する。それは1605年の事であった。ヘンリー八世の手によってローマカトリック教会から英国国教会を分離独立させた政治への抗議、王室への反逆行為としてこの事件は発生したものとされている。⁶⁾ 11月 5日は事件の首謀者の一人である Guy Fawkes が逮捕され、事件が未然に発覚し、当時の議会とジェームス一世が無事であった事を祝う祭りとして400年間も続いている。これはケルトの Samhain の火祭りが Guy Fawkes Day と、その看板を塗り替えたもの resurfacing と言われている

Samhain が行われるのは温暖と寒気、光と闇、生命と死とが交錯する時である。互いに相反する要素の境界線が希薄になる時である。それは同時に過去と現在、現世と来世との境をなす時である。

いわば、不實在の過去や不確定で混沌とした未来及び来世と、現在という實在の瞬間とを繋ぐ時だとも言えよう。Samhain は今日では Halloween と言われる。これは hallowed evening “神聖な夜” を意味する Hallow E'en の二語が一つに contract されている。こうした聖なる時をとらえて人々は宴を持つ。その食卓にはその年に逝去した人の席が用意される。家の門、扉、窓は施錠がはずされる。通路には明かりが灯されて死者が自由に入場出来るように用意される。そして死者の霊を迎え晚餐を共にするのである。ローマカトリック教会はこれらの習俗を異教徒の儀式のとして名残りであるとしてこれをそのまま認めず、All Saints Day 諸聖人の日として改め、キリスト教の殉教者諸聖人との霊交を深める日と改めている。11月2日を All Souls' Day 万霊節として逝去した layman の霊を記念する日として Samhain の祭事の主旨を残している。

11月11日の聖マルティン祭はハローウィーンのゲルマン版と云える。ゲルマンの神々にその年の収穫に感謝し、翌年の豊作を祈願する祭りがドイツやスイスなどでは古くから行われていた。農民は地代などその年の貸借関係の支払いを終え契約を更新し、その日を以て一年の節目としていた。その日はやがてキリスト教の聖人マルティンを讃える日として受け継がれるに至る。冬、そして新年の到来を祭事化した嘗ての異教徒の祭りは、現在、聖マルティン祭となって提灯行列や火祭りが行われている。

日本でもお盆は祖先の精霊が迎え入れられる時季となっている。8月16日の夜は再び冥府に帰るのを現世の人々が「送り火」をもって見送る時である。各地で行われる精霊流しに加えて、京都では大文字五山送り火が夜空を華やかに彩る。京都の人々はこの火の燃えるのを眺めて夏の過ぎゆくを惜しむ。それは過ぎ逝く太陽の季節への挽歌である。こうした先祖の精霊祭は盛夏、お盆の時季に行われるのが今日では定着している。

然し古くは必ずしもそうではなかったようである。徒然草はその第十九段で「……大みそかは亡

き人が来る夜として故人の魂を祭る行事があったが、最近都ではすたれてしまった。ところが、関東では今もその行事が残っているのを見たことがある……」と紹介している。

現代語訳 三木紀人 講談社学術文庫より

日の光の薄い冬季に祖霊を送迎する習俗の中に、ケルト及び日本社会における季節への反応の類似性を見出すことが出来るのである。

米国では大学卒業生が年に一度母校へ里帰りする日 homecoming を定めている。又、物語の世界では古くはユリシーズが、そしてグreekの組曲としても知られる北欧神話の素材から採られたイブセンの作品の主人公 ペールギュント Peer Gynt が、近くではオズの魔法使いの主人公の少女ドロシイが、それぞれの長い彷徨の旅路より home への帰還を果たすところで物語を終えている。正に Home is home. There is no place like home. である。

日本ではお盆やお正月には都会から郷里に向けての帰省ラッシュが毎年行われている。故人の霊を含めて人間の帰趨本能は古今東西を問わず普遍的なもののように見える。それを迎える home の人々の暖かい灯火も帰省を望む人達への何よりの癒しであり、そして束の間、彼岸より帰りくる祖霊への供養となるのであろう。

死後も成仏出来ないで地上を彷徨う霊を鎮めるため現世の人々が神仏に供養を捧げる習慣が日本にもある。菅原道真の怨霊を宥めるべく建立された北野天満宮などその一例と云える。キリスト教の場合、地獄と天国の間に煉獄があるとローマ旧教は説いている。ハムレットの亡父はその煉獄で苦しみ状態に陥っていた。彼は幽霊となって地上に舞い戻る。自らを殺害した者への復讐が成就されない間は天国には行けないのだと息子ハムレットに告げ、その実行を霊前への供養としてうながす。ハムレットの復讐劇はここから展開を見せるのである。

キリスト教以前のケルトの人々は冬の間人々の生活を脅かす厳しい自然の精、嵐や風雪、冬の季節食べ物求めて人里に近づく狼、そして病魔な

どに、地上を彷徨う行き先のない霊がその姿を変えていると想像した。或いは又、自然の脅威を擬人化して、それらを悪魔とみなしたのであった。

ところでケルト民族の末裔であるアイルランドの人達の多くが米国に移住している。それは英国に植民地化されていた時代の生活苦や19世紀半ばの食料飢饉が生み出した当時の社会現象に起因している。アイルランドのシンボルカラーである緑一色で飾る聖パトリック祭はその年の春の訪れを告げる行事である。それは米国の年間行事の一つとなっていると云い得るであろう。このように彼等の持ち込んだ習俗のあるものは米国文化の主流を成している。それらはより華やかな形に姿を変えて今日ではアイルランド本国や英国へと逆輸入されている。

ハロウィーンの夜、米国ではオレンジ色のかぼちゃの中をくり抜き、灯火を入れて Jack-O'-lantern を作り、それを家の外に向けて置く。明かりは招待客への誘導灯となり、同時に燃える炎は狼に具現される、いわば、招かざる者への追い払いの役目を果たす。それは祖霊を招き入れる反面、悪霊を家に近づけまいとする一種の悪魔祓いの象徴であった。又悪霊に扮し諸々の派手な仮装に身を包んだ子供達が“ご馳走してくれなければ悪戯してやるぞ” trick-or-treat を叫びながら近所の家々を廻ってお菓子などの寄進を乞う習慣がある。その昔、ハロウィーンの夜、帰宅先の当てのない彷徨える霊は見知らぬ家の扉を叩き、戸別訪問を行い、勧進行為を行っていたとされた。その家の宴の席には招き入れられる事はない。追い払われるか、冷たい外気に曝されながら托鉢に浴するかどちらかであった。茶目っ気に満ちた子供の遊びは、“trick or treat” と喜捨 gooding を迫る。この習俗のルーツはここに発していると言われている。

話替わって1992年、学業成績が優秀とされた日本人高校生が渡米留学先でハロウィーンの夜、仮装姿で、訪問する筈の家ではなく、誤って見知らぬ家の玄関に近づくという行動に出た。その家の住人からは玄関に近寄らないように警告されたが

アメリカの俗語用法 usage に疎いその高校生はその言葉の意味を把握できず、更にその足を玄関の扉に近づけた。その結果、射殺されるという事件を招いた。裁判の結果、陪審員全員の評決支持を得て射殺者は無罪となった。日本では到底考えられない国情の違いをまざまざ見せつけられた事件であった。開拓時代からの米社会の伝統は自身及び家族の人身や私生活を守るために個人の銃保持をも認めている。これは障子や襖の家屋生活で和気相合の空気に慣れた日本人の理解を超えたものである。加えて、英文法や標準英語のみを教室で採り上げた学校英語教育の結果が生んだ日本人の不十分な communicative ability の問題などがこの事件の直後の日本では指摘された。

その事件の数年後、私は外国での旅行中に列車の車中で上品な感じの米国人中年女性とひとときの会話の機会を持ったことがある。そこでこの問題の反応を試みてみた。彼女いわく、日本人は abortion を平然と行っている。胎内で成育中の自らの愛児の未来の生命を絶った場合、法律的にも道徳的にもその罪を問わないような、いわば、間引き文化を曳きずった社会に属する人々がこの件で非難めいた見方を持つのは如何であろうか。個人生活 privacy の大切さは An Englishman's house is his castle. と諺にも示されている。城である筈の個人の住居に奇装をした正体不明の者が侵入しようとする時、先ずその者に対して誰何する。そして警告を無視した場合には発砲する。これは手順に従った米国流の正当行為に他ならない。この発砲行為は自衛 protection に基づいている。そしてその言葉を繰り返していた。

国際交流を奨励する事は大切ではある。ハロウィーンの習俗の歴史的な背景や、各民族、国民が持つ倫理的な基準についてその相違をもっと理解しておく必要があるように思う。

クリスマスと教会暦の新年

クリスマスという片仮名文字の日本語を耳から聞いたり、書かれたその日本語を読んだだけでは

それがキリストと結びつくとは限らない。然し英語文字で表すと Christmas つまり Christ's Mass という語の contraction である事が直ぐに分かる。mass はミサとか聖祭という意味である。クリスマスとはキリストの生誕を祝福する祝祭である。省略形の Xmas も日本では師走の頃、商業表示などでよく見かける。これは Christ のギリシャ語 Xristos の頭文字を採ったものである。キリスト降誕祭は仏語ではラテン語の誕生日を表す natalis に由来するノエル Noel を用いる。独語ではヴァイナハト Weihnacht 聖夜である。英語の場合の Christmas は O E D によれば 1123 年にその初例を残している。日本語としてのクリスマスと云う語は明治初期に英語圏、就中、米国より舶来して我が国に帰化したものであろう。教会暦は、シーザー暦が 1 月 1 日であるのに対して、12 月 25 日 つまりクリスマスをもて新しい年の始まりとしている。336AD 然しながら、キリストの生誕については新約聖書のルカ伝やマタイ伝にその既述は見られるものの実在人物としてのイエスキリストの誕生日を 12 月 24 日の夜半であるとするのは季節の点において記述内容に矛盾も見られ、特定する事は困難である。東方正教会は旧約聖書に記述された天地創造の第一日をシーザー暦の 1 月 1 日と重ねた。その結果、第六日目の人類誕生日となる 1 月 6 日をもってキリスト誕生日と決めていた。今日でもアルメニアでは 1 月 6 日をキリスト誕生日としている A.D [Anno Domini], そして B.C [before Christ] の記号でキリスト降誕の年とし、その年を以て西暦紀元前、西暦紀元と紀元表示の基準年としている点は、12 月 25 日の誕生日の場合と同様に、史実に基づくものとは云えぬ。

ちなみに the second millennium は日本では皇紀 2660 年に当たる。日本では皇紀は云うまでもなく、現行の元号をも problematic であるとして遠ざけ、西暦の普遍性を支持しその正当性を主張する人々に出会う時がある。

昭和 15 年、紀元 2600 年の祝祭が全国的な熱狂の中に行われ、民族的な高揚を示したという事実を

私は知っている。当時の政治と迷信に踊らされた民衆が演じた喜劇的一幕として一笑のもとに片づけようとする人々が今日では多いのも事実である。

学問領域における分類の立場に限って云えば、確かにホメロスの叙事詩イリアッドオッドッセイの物語はシュリーマンの手によるトロイ遺跡の発掘の成果によって史実として認められて神話から歴史の世界へとカテゴリーを転じている。それに引き替え古事記、日本書紀は固有の文字を持たない時代の産物である。伝承の文化は何処までも夢物語に過ぎないのであろうか。

吟遊詩人によって謳い始められたアーサー王伝説は後に文学や歴史の source として採り上げられ、今やケルト系の人々の民族的な資産となっている。神話と歴史は融合し、民族の文化遺産として継承され、連続して生きてゆくものである。国際通用度の高い言語、英語の場合に譬え、西暦を以て standard としようとするならそれはそれで良い。その場合とて自国語である日本語の学習、固有の民族文化を否定する事にはなるまい。ユダヤ教、イスラム教の暦や紀元を採っている国々をも踏まえ、それらを相対化した上で、更に神話とか歴史に向かい合う必要があるように思う。

ここで「サンタクロースの秘密」クロード・レヴィ＝ストロース／中沢新一 せりか書房 40 ページ から次の文を引用しておきたい。“習俗は、理由もなく消えたり生き残ったりはしない。習俗が生き残りつづけているとすれば、歴史の進みの淀みとしてではなく、むしろ、機能の永続性のなかにこそ、真実の理由をみいだすことができるだろう”

さて、冬至の頃を祝う行事はキリスト生誕以前より異教徒の祝祭として行われていた。その一つとしてローマ人には農耕神 Saturn を祝う Satunalia があった。英語の Saturn は日本では「土星」として、そして又 Saturday 「土曜日」として知られている。Saturn の語源のラテン語は satus, 英語の sowing つまり、種蒔き、植え付けである。⁷⁾ 農耕は「土」を舞台として行う生産活動であり、ドラマでもあるのでこの英単語は直訳されていて理解し易い。さて、この日は収穫の

季節の終わりと翌年の作物の種蒔きの行事を祝う日であった。12月17日から24日迄の期間、家々では明かりが灯され、常緑樹が飾られ、贈り物の交換が行われたり、或いは又、この時に限って主従が役割を入れ替わって「無礼講」騒ぎを演じたりするなど現在のクリスマス祭典において人間の絆を謳うその楽しさの原型があった。

12月25日はペルシャ神話の光の神 Mithra ミトラを祭る日でもあった。そして3世紀～4世紀のローマにおいてはこの日はミトラ信仰 Mithraism の祭日としての習俗が普及していた。その信仰対象はギリシャ神話の太陽神ヘリオス Helios へと移行し、更にローマ神話の Sol Invictus、英語では Invincible Sun or Unconquerable Sun の誕生日となる。「闇」の力によって「征服されることなき太陽」とは冬至の太陽である。この時季を迎えると一日における日照時間が最も少なくなる。然しその太陽は翌日を起点として撤退地から転回して新たな進軍を始める。その日から日一日と日差しの時間を増す。それは人々にとって失意から希望へと変わる“時の分水嶺”である。

太陽は永遠に地上からその姿を消すことはない。光が闇の力によって永遠に屈服させられる事はないのだ。光と闇の覇権争いのドラマをテーマとした習俗はその他でも多く見られる。小説 The Return of the Native の中でクリスマスの時季に英国の農村において村人達によって演じられる身振り狂言 mummary を Thomas Hardy は紹介している。ここでは十字軍がトルコの騎士と果たし合い、相手を倒す plot となっている。これは冬と夏の間の季節の争いを劇化した異教徒の時代からの素朴な民衆劇として永く村に残っていたものである。夏と光の季節を擬人化したイングランドの守護神、聖ジョージは、冬と闇の季節を象徴するトルコの騎士に打ち勝つ。その時がクリスマス、つまり、冬至の時であるのは意味深い。

又、ケルトの神話ではそれは榿の木王 Oak King が、柊の王 Holly King を打ち負かす時である。柊の王は寒冷と闇の季節を表す。一方の榿の木は光と緑の季節の象徴である。ゆえに榿の木

の勝利と同時に光が世にあまねく行き渡り、全ての生命が地上に蘇る契機となるのである。

北欧スカンジナビア、アングロサクソン、ケルトの人々は毎年冬至の時季にユールの祭事を行っていた。英語の Yule はスカンジナビア語で Jol でその意味は車輪 wheel である。これは循環する四季、特に、冬至期の太陽の旋回を意味している。

ユールの習俗としてユールの丸太 Yule Log がある。榿の木は北欧神話の雷神 Thor の化身であると云われている。そして又ゲルマンの主神 Odin が自らを Jolnir とか、或いは Yule-one と称した事に由来するとも云われている。榿の木はケルトの民族宗教であったドルイド教の祭祀において中心の役目を果たす木であった。この榿の木が素材のユールの丸太は12月24日の夜に屋外の林隙地に持ち運ばれて点火され篝火が作られる。その火の周りに人々は集まり“歌い踊る”。人々の騒々しき興奮は太陽を永い間の眠りから呼び覚まして、春へと向かおうとする軌道上の太陽の進行を加速させる。夜よりも昼間の方がより長い時間となる季節の到来の切望を表している。太陽の地上への帰還は歓喜に繋がる。

旧約聖書には伝道の手記 Ecclesiastes 3 の所で“この世には、すべてに時があり、それぞれに時期がある”と云う言葉で始まる。生まれる時と死ぬ時、種を蒔く時、癒す時、笑う時、そして“踊る”事が必要な時があることを伝えている。又、日本においても天の岩屋の奥にその身を隠した天照大神の再来を願い、「かぐら」を行い、つまり「神を楽しませ」、何とか神の関心を引き寄せようとして岩戸の前で繰り広げられた神々の歌や“乱舞”orgy があった。

ユールの踊りの際に人々は仮装して寒冷期の悪霊を嚇かして追い払い、来るべき翌年における生活の無事と豊作を願うのである。ユールの丸太は家の中へも持ち込まれる。丸太には青葉やリボンの飾り付けが施される。2月2日 Candlemas に切り倒された榿の木の丸太は1年間乾燥されたのち、冬至期を迎えて家庭の暖炉に投げ込まれる。

12日間、それは太陽の如くに赤々と燃やし続けられる。丸太の燃え殻や灰は病気を治し、雷を防ぐ魔除け protective amulet と信じられたのである。⁸⁾

その後、人々の生活様式は変わってゆく。暖房方式も炉床から鑄鉄製のストーブへと移行する過程で丸太のサイズも小さくなる。更に石油ボイラーによるセントラルヒーティングの施設の整いつつある今日ではその姿を消すことになる。ユールログは柵や薔薇の糖衣の装飾の付いたロールケーキとなって、生まれ変わった姿でクリスマスの食卓に置かれている。パリのレストランではクリスマス イヴには夜食として wake up の意味を持つ特製のフランス料理レヴェイヨン le reveillon が出される。そのデザートには ブッシュドノエル bushe de Noel ユールログケーキが添えられる。

シェークスピアは作品「トロイラスとクレシダ」の中で、現在保持しているどんな名誉も美貌も「時」によって貪り食われてやがては失われてゆく事を指摘している。「マクベス」においては、点灯された蠟燭に人生を譬えている。生命の火はやがて燃え尽きて後には何も残らないと云い、「ハムレット」ではあの世から帰還して死後の世界を報じた旅人はいないと述べている。又、「ソネット」の中では人間は自らの分身である子孫を残すことで、そして優れた芸術家はその生命の分身となる作品を世に残すことで、己の生命の永遠化が計られるだろうという望みを抱くのだと云っている。何れにせよ死後における永遠の生命を期待し、春に回帰する太陽と同じく、死から生命の再生の必ずあるを信じる事で、時間の停止、永遠の死という恐怖から逃れる事ができるのだ。

誕生日の祝辞に英語で Many happy returns of the day! を用いる。この場合、再来、循環 return の意味は重要である。刻む時の推移が直線ではなく、終焉のない circle, “cycle” と云う輪廻再生への信仰に救いを得ようとするのが人間であらう。

冬至期の太陽は一見、死を迎えたかのようにである。然しそれは必ずや 死ー復活ー再生 へ繋がる

道程の一点に過ぎない。キリスト教会がクリスマス以上に復活祭をより重要視する所以はここにある。ともあれ、世に metaphysical な「光」を与えるために現世に降臨した主イエスキリストの生誕は冬至の時季における physical な春を呼ぶ太陽の生誕そのものである。光への信仰はクリスマスの4週間前からドイツを中心として行われる待臨節 Advent の時にも見られる。Advent の語源はラテン語で、その意味は英語の “coming towards” である。これはキリストの誕生を待望する信者の気持ちを蠟燭の光で表わそうとするものである。

樅の枝で作った装飾の花輪 Adventskranz, wreath に4本の蠟燭が立てられる。4本は4週間を意味する。4の数字はその昔ユダヤ人が救世主の誕生を4千年待ち続けたと云う故事に由来している。その中の3本は薫がかった濃い紫色で、あとの1本はピンクがかった薄い紫色である。濃い方は後悔、悲哀、切なる期待を、薄色の方は来るべき希望を表している。そして1週間毎に1本ずつ点灯が加えられてゆく。クリスマスには満飾となって輝く。

北国スウェーデンではサンタルチアの祝祭が行われる。スカンジナビア諸国は北極に近く12月になると一日中日の光を見る事の出来ない日々が続くのも稀ではない。この時季に肉眼では見えない、幻に近い太陽を求めて人々が丘に登り、東に向かって遙拝する姿も見受けられる。

「ハムレット」の舞台はデンマークである。クリスマスが近づくと夜明けを待ちわびる雄鶏の鳴き声が活発になり、闇の中をさまようの悪霊の動きも鎮まる事が記されている。とにかく北欧において光への願望は強い。St. Lucia Day の Lucia, Lucy とは英語の light である。照度の国際単位である lux は同根の語である。光にこがれる北国の人々のこの聖ルシア祭は異教徒の時代12月21日～22日の期間に行っていた冬至祭にその源流を辿る事が出来る。

聖女ルシアとはキリスト教が公認される以前のローマ帝国で信仰に殉じたイタリア、シシリア島

生まれの女性である。その私財を貧しき人達へ分かち与えた聖女ルシアの他界を記念した12月13日の祝祭日としてこの季節の祭りは新たに生まれ変わる。内容も太陽への希求と他者への慈愛を惜しまないキリスト教の精神が融合したものとなっている。祭りの行列には聖ルシアの役に選ばれた美しい少女が行列の先頭に立つ。頭上に7本の蠟燭を点灯し、緑の葉で飾った王冠を載いた彼女は無垢の象徴である白いドレスに、太陽の炎の色であり、殉教したルシアに血の色を表す赤い腰帯を身に纏い、手にはケーキを載せたお盆を運んでいる。⁹⁾ 同じく白い衣装を着たより若い少女数人が蠟燭を手を持ってそのあとに従う。更にそのあとに先の尖った円錐形の山高帽をかぶった一団の少年が松明を持って続いている。工場、事務所や病院を訪ね、暗い夜道を農場から農場へと廻り、戸別訪問をして焼きたてのパンと暖かいコーヒーを配って廻る。夜明け迄それを続ける。或いは又家では長女が夜明け前に家族より先に起床して彼等に特製の黄色のパンとコーヒーを給仕する。そして一同揃ってイタリア民謡のサンタルチアを合唱する。

ドイツでも聖ルシア祭は形を変えて同じ日に祝祭として生きている。17世紀の30年戦争当時のスウェーデン軍に占領されたドイツにおいて彼等の置きみやげとしてこの風習が伝わったとされている。それは光の祭り、提灯行列、灯を入れた模型の屋形を川に流すなどの形となって残っている。ここでクリスマスを演出するその中心をなすクリスマス ツリーに言及してみたい。

クリスマス ツリーはクリスマス祝祭の中心的な役割を演ずる舞台装置の一つである。ツリーに使われるモミの木は四季を通じて緑の葉を付ける木として大切にされ、人々の生命への永遠願望の象徴として崇拝されてきた。古代エジプトでは冬至期に棕櫚の小枝を家に持ち帰ってそれを「生命」の「死」に対しての勝利の象徴として飾っていたといわれる。キリスト教が入ってくる以前のスカンジナヴィア半島でも冬至期、つまり太陽の折り返し点において家屋や納屋を常緑樹で飾っていた

事が伝えられている。樅の木を神聖化していたドルイド教徒は、その木に果実や蠟燭の飾り付けを着けて収穫の神々を讃えて儀式を執り行っていた。

8世紀にブリテン島出身の修道士 English monk, St. Boniface 聖ボニファスは伝道のためドイツを旅していた。或る夕刻、森を歩いていた時に彼は異教徒の手で行われている宗教儀式に出会った。そこでは樅の木に生贄に捧げられんとしている子供を見たのであった。ボニファスは異教徒の偶像崇拜の対象である樹木信仰がいわば迷信であることを立証する好機であると思い、強壯で不動とされる樅の木を拳で以て切り倒しその権威の失墜をおこなった。するとその地から常磐木 evergreen が生えてきた。この木は生命の木であり、これをキリストの永遠の生命を示すものであるとボニファスは説いたといわれる。

クリスマスツリーに纏わる更なる伝説の主は、かの宗教改革で知られるマルティンルター Martin Luther である。彼はクリスマスイヴに森を歩いていた時に樅の木の木立の枝を通して漏れる満天の星を見てその美しさに打たれた。そこで背丈の低い樅の木を引き抜きいて家へ持ち帰りその感動を妻と共有すべく蠟燭を星の代わりに散りばめて小枝に着けて点灯し、森で見た場面を再現した。これはやがてルーテル派教会の信者の間において拡がりを見せる。現在のようなピラミッド型の三角形に刈り込まれた樅の木はキリスト教の父と子と精霊の三位一体の象徴とされている。これに蠟燭の飾り付けを添えた樅の木 Tannenbaum はクリスマスに飾られるようになった。記録に拠れば1605年に初めて教会に飾られた事になっている。こうしてアルザス地方を始めとしてドイツ各地でクリスマスの時期に見られるようになる。加えて、人々は旧約聖書のアダムとイヴが登場する楽園に現れる樹とイメージを重複させ、飾り付けには林檎の実を着ける。これは教会にも個人の家庭にも置かれるようになる。これに木の実やマジパンクッキーなどが、更には、果実、花、小型蠟燭、満天の星をあらわすガラス細工、豆電球などが加わってゆくようになる。このツリー

の習慣はヨーロッパ一円へと普まってゆく。やがて19世紀大英帝国の最盛期のヴィクトリア女王の女婿であるドイツのザクセン・コブルク・ゴータ出身のアルバート殿下によって英国ウインザー城に持ち込まれる。又、ドイツ系移民によって19世紀の米国でもクリスマスのシンボルツリーとしてもはやされるようになる。今日ではニューヨークやロンドンの中心部の広場に光と緑を象徴する華やかなイルミネーションの付いた巨大なツリーが置かれて冬至の時期を飾る大都会の風物詩となっている。又地球の南半球に位置するニュージーランドやオーストラリアでは英・欧系の人々は先祖伝来の習俗を受け継ぎ、暑い太陽の季節にあってもクリスマスツリーを毎年飾っている。キリスト教国では世界中の家庭の居間で小型のツリーは飾られる。世界の多くの人に親しまれているブラームスの子守歌 *Wiegenlied* の中でもツリーは登場し、幼児を安らかな眠りと美しい夢の世界へと導いている。

日本のお正月には門松が飾られる。松は常緑樹である。年を更める事は冥土の旅への一里塚を確認する事ではない。人々は松の変わらぬ若さと緑に心を寄せて自らの不老長寿の願いを託するのである。竹も又この時季にその色を変えない。梅は他の花に先駆けて早春になるとその枝に花を着け春を呼び込む木である。これら、お正月に松竹梅を立てる習慣は異教徒の時代のヨーロッパの人々が抱いた樹木崇拜の儀式に発想において近いものがある。

異教徒の時代の祭祀に始まったクリスマスが今日のように教会を中心としての年中行事の一環として定着する迄には紆余曲折があった。祭りの中身が異教の名残りを留めているとして英国国教会、特に清教徒から排斥された時期もあった。そして今日また、時代環境の変化も受けて教会のミサよりも、Xmas カード、Xmas セール&プレゼント、Xmas ツリーなどを広く網羅したアメリカ型の“街のクリスマス”が世界的に受けている。それは大量消費社会の渦の中に巻き込まれ、経済活動を支える一大イベントとなっている。クリスマス

は再び「俗」の祭典の方向に向かっているかのようである。

然し祝祭にキリスト精神が入ってきた事で祝祭のモラルバックボーンとして人々の愛、他者への奉仕、寛容、貧富の差のない公平な社会の実現の主張などが一層色濃いものとなったのも事実である。

文学作品を通してみると Charles Dickens の「クリスマスキャロル」A Christmas Carol, O. Henry の「賢者の贈り物」The Gift of Magi, Oscar Wilde の「幸福なる王子」The Happy Prince, Hans Christian Andersen の「マッチ売りの少女」The Little Match-Seller, James Joyce の「死せる人々」The Dead などの作品はクリスマス シーズンを背景にしてキリスト教精神がその下敷きになっている。クリスマスは社会における人々の絆を確かめ合い、愛を分かち合う時である。特に家族の集い、夫婦や親子間の愛情の交流がこの祝祭日には展開され、そのクライマックスに達する。暖かい炉端での食事、贈り物の相互交換、ゲーム、クリスマスキャロルの合唱などが次々と劇的に演じられる。

家族と言えど大家族制度の人間関係の煩わしさなどのマイナス面が強調された結果、今や核家族が主流となっている。更に都会生活ではシングルライフが trendy となり、家庭の味が忘れられて take-out, delivery の食品提供の需要が勢いを増し、加えて嘗ての家事部門の機械能率化や就職の分業化などが独身生活の営みを容易にしているこの頃である。日本でも大都会のレストラン・カフェでは、最近、男女を問わず、独りで食事をしたり、仕事上の書類に目を通し或いは記入を行ったり、更に又、喫煙や自由な思索を含め、孤独で自由なくつろぎの時間を過ごしている個人を見かける事が多い。

このような世相にあって米映画 When Harry met Sally...「恋人達の予感」は30歳を過ぎた独身の男女ハリーとサリーの結婚というテーマを通して現代における人間の生き方について考えさせてくれる。男女間で性意識を伴わない真の友情

が可能であると二人は主張し、長い期間、友人としての交際を保っている。しかしそれは偶然の機会に崩れてしまう。二つの性は友情の垣根を越える。今や友人でもなく、又、夫婦でもない宙ぶらりんな関係となった彼等それぞれが独身生活を続けてゆく事の意味をクリスマスの時期に突きつけられることになる。家族団欒の世界の圏外に立っている二人は自らの現在及び未来の生活を見つめ、結局は結婚への道を選ぶに至る。その道程が明るく描かれている。

現代人はしきりに individual identity の確立を求める。その一方で家族や社会と云った複数人員より成り立つ一つの集合体の連帯を必要とし、加えて自らの帰属を家族、宗派、民族などに求める傾向をも持っている。その主発点は互いに心と体を寄せ合った男女が家庭を築く事からであろう。そうした communion の核となる家族がクリスマスの夜に冬の冷たい外気とは別世界である家庭の暖炉の燃える室内で用意された御馳走を前に集う。そこに生まれる楽しい雰囲気の中で、或いは、教会に集う会衆の祈りの中で reunion と愛の力を再発見する。それをこの世における光の当たらない所へ、即ち、愛を「家庭より社会へ」と拡散してゆこうとする。クリスマスとはそのように遠心力から求心力 vice versa に向かうエネルギーの発生源 generating station と云えるのではあるまいか。

1月1日と新年

新年の祝祭としてスコットランドのお正月を見たい。スコットランドでは12月31日から1月1日にかけての新年の祝祭がクリスマスよりも一層の賑わいを見せる。この祝祭の起源は緯度が高く冬の間日の光に恵まれないスコットランドの人々が異教徒の時代に行われていた太陽を呼び戻そうとする冬至祭に遡ると云われている。イングランドではクリスマスが異教徒の祭事に基づいたものである事に加え、宗教改革直後クリスマスがローマカトリックの認めた祭礼であるとの理由から、

一定の時期、英国国教会によって禁じられていた。スコットランドの場合、スコットランド教会 Kirk による禁止の期間がより一層長かったため、キリストの生誕と重複する年改めの寿ぎでもあったクリスマスの祝祭部分が実質的に暦の上の新年へと移ったものと推察される。スコットランドの新年は Hogmany と呼ばれる。語源はゲール語で New Morning の意味であるとか、アングロサクソン語で Holy Month であるとか、或いは古代ギリシャ語でその意味は Holy Moon であるなど諸説がある。ホグマニイは過ぎゆく古い年を見送り新しい年を賑やかさを以て迎えるスコットランド人による年越しの節目の儀式である。家屋は隅々まで清掃を行い、壊れたままのものには修理を施し、人から借りていた物は返しておく。借金は必ず精算する。31日の真夜中になると通りでは鍋は打ち鳴らされ、城内では銃や大砲による祝砲が夜空に向けて発射される。インヴァネスを始めとしてスコットランド各地の町の広場や歩行者天国でこの祝祭行事ホグマニイが行われる。中でも首都エジンバラはこの浮かれ騒ぎの中心地となって50万人を超える人出となる。

12月30日から1月1日にかけて少年による民族衣装キルトの着用、笛、バグパイプ、太鼓などから成り立つバンド演奏、ケルト式舞踏会ケイリー ceilidh、花火大会、野外劇そして食の祭典などの諸行事が続く。家族単位の参加で行列が編成されている松明行進が市の中心部を練り歩く。そして Carlton Hill で行われる火祭り " fire festival " がある。

祭りはその時、最高潮に達する。31日には夜の11時からコンサートが始まる。12時深夜を迎えると街頭でのダンスや大型の花火の打ち上げが行われる。日本における除夜の鐘のスコットランド版と云えようか。教会の鐘は夜明けまで打ち鳴らされる。12月31日の夜中の賑わいの行事はスコットランド以外の地でも見られる。

ポーランドでは教会の高い塔上から消防士がらっぱ bugle-call を吹奏して新年を告げている。ライン河を航行中の船舶からは一斉に汽笛が鳴らさ

れ両岸の村や町の人々に新年の訪れを知らせている。近年呉市及び日本の港湾都市では除夜の鐘の他に、沖合に停泊する船舶から汽笛が深夜12時を期して一齐に鳴らされるようになった。それは新年に港町ならではの雰囲気添えている。

英語圏の国々では大晦日の12時を過ぎると Auld Lang Syne の曲が合唱される。この曲は日本では“蛍の光”として知られ学校の卒業式などに奏でられている。原詩はスコットランドの詩人 Robert Burns によって作られたものでその歌詞は古き友人、知己の絆の大切さを述べている。この時は出会ったばかりの見知らぬ者同士の場合を含め、共に杯を交わし合唱を行い新年の歓びを共有するのが習慣である。そして又、今日ニューヨークのタイムズスクエア、ロンドンのトラファルガースクエアのカウントダウンは有名となっている。新春の到来をを待望する気持ちは、西欧も極東も、そして、大人も子供も同じであろう。日本でもミレニアムのカウントダウンフェスティバルは、知る限りでは、東京お台場公園、大阪城公園を始めとして日本の各地で催された。これが日本の習慣として成り立ってゆくかどうかを判断するには今後を見守る必要がある。

テニスン Alfred Lord Tennyson は教会の鐘の音で以て旧年を追いついて新年を迎える“賦”，NEW YEAR BELLS を次のように残している。

①

Ring out, wild bells, to the wild sky,
The flying cloud, the frosty light;
The year is dying in the night;
Ring out, wild bells, and let him die,
Ring out the old, ring in the new,
Ring happy bells, across the snow;
The year is going, let him go;
Ring out the false, ring in the true,

②

Ring out the grief that saps the mind,
For those that here we see no more;

Ring out the feud of rich and poor,
Ring in redress to all mankind
Ring out a slowly dying cause,
And ancient forms of party strife;
Ring in the nobler modes of life,
With sweeter manners, purer laws,

－後略－

この詩の中では「鐘を鳴らして追い出せ」は ring out, 「招き入れ」は ring in で示されている。去らねばならぬものは自然が持つ冬の厳しさであり、この世の不実、不幸、争い、陋習などである。迎え入れるべく待ち望まれるものは新しさ、改革、真実、公正な社会、そして温暖な春、キリスト教社会主義の理想をも滲ませたこの世の春を暗示している。前年の古い汚れを追いついて新しい希望を持った新年を迎えようとするのは日本における年末の忘年会や、そして大晦日の大掃除などとの類似性が見られる。又これは旧正月、お節句の際の豆まきの行事「鬼は外、福は内」を連想させる語句である。

ドイツでは悪霊の充満する暗い冬、即、旧年を鐘や太鼓を打ち鳴らして追いついて希望に満ちた新しい年を迎えるという古くからの民間信仰に由来する Silvester の行事で賑わいを見せる。大晦日の夜、大勢の人々は酒精分を入れて街頭へと繰り出す。12時を期して花火が打ち上げられる。それを合図に見知らぬ者同士が互いに抱擁しあい新年を祝して Ein gutes neues Jahr. と挨拶を交わす。スペインでは真夜12時の鐘が12度音を以て時を刻むのに合わせ、路上の群衆は鳴らされる鐘毎に葡萄一粒を口に入れ12個の葡萄を食べて翌一年の12ヶ月の幸運を祈願する習慣がある。オランダでは同夜豪華なシャンペイン付きの夕食を家族で楽しむ。或いは又、スーパーマーケットで購入したシャンペインを手を持った人達が路上で出会った見知らぬ者同士で瓶を分かち合い新年の慶びを共感する。パリではシャンゼリーゼ通りやバスチーユ広場などは人出で溢れる。花火が打ち上げられてエッフェル塔の全景が夜空にくっきりと浮かび上がる。

日本では静寂の中で遠くまで鳴り響く108回の荘厳な除夜の鐘を聞き終えるのを待って都会では深夜から早朝にかけて神社への初詣客で神社の参道などは賑わいを見せる。日本には又、生命の細く長かれを願って大晦日に年越し蕎麦を食べる習慣がある。これは蕎麦の形を人生に譬えた metaphor であろう。米国においてはオランダ系住民が1月1日にドーナッツを食べる習慣がある。その環状となった形が四季の循環を象徴しているからという縁起担ぎに基づいている。それはやがて巡り来る太陽の季節の到来を期待する遠い昔の自然信仰の時代からの踏襲である。同じく日本におけるお正月の“円形餅”が新年の太陽を象徴していると説明する人もある。

年末そして大晦日に花火の打ち上げと言った人工の太陽、つまり、発光を生み出し、或いは又、騒音をもって冬を追い出すといった風習は日本では今までの所はない。伊勢二見浦の夫婦岩の間から生まれ東方洋上に浮かび揚がって来る元旦の日の出を拝したり、人々が日本各地の山に登って向こう側の山の峰や海上から御来光が昇るのを仰ぐという習慣が未だ残っている。人工の光ではなく本物の太陽に接するのを願うのである。西欧のような「はしゃぎ」が日本に見られないのは両者の地理的環境の違いによって人々の自然に向かい合う姿勢の差異をもたらしたのかも知れぬ。

ここでスコットランドにおける年越し風景の舞台を家庭の場面に切り替えてみたい。12時が過ぎ日付が翌朝1月1日に改まると初訪問“first footing”が始まる。スコットランド及びイングランド北部地方において行われる大晦日から元旦にかけての first footing は近所の家々を訪問する人、そして訪問を待ち受けて家に居残る人と二種類となる。訪問者はドルイド教の聖なる木、やどりぎ mistletoe の小枝を手に持ち、「暖」をもたらすウイスキーとか燃料の炭、命の糧の象徴であるスコットランド特製の各種パンなどの食べ物を手みやげ handsel として持参する。そして12時を過ぎたらその家の扉を叩くのが習慣であった。訪問者は家々を次々と廻るにつれて酒も注がれて

ゆき夜明け前にはほろ酔い機嫌となる。来客を待つ側は最初の訪問者が長身で黒髪的美男子であった場合には幸運の証としてそれを喜ぶのが習慣となっていた。それが黒髪であってブロンドの髪でないのは見慣れぬタイプ人に警戒感を抱き、気を許さなかったヴァイキングの時代の見知らぬ者への警戒感 Xenophobia から来る一種のジンクスであろうと推測されている。その一方で同族の人々へを暖かく歓迎し一体感を強めていた。

これは日本の元旦の挨拶まわりと似通っている。日本でも嘗ては元旦当日多くの人々が親戚とか職場の上司の家などを廻って年賀の挨拶を行っていた。そのため家々では予想される来客の数の酒と料理や、同伴の子供達へ手渡すお年玉を用意して待っていた。これは部屋の間を仕切っている襖を取っ払えば、即、宴会場、或いは集団用寝室に直ちに転じるという日本家屋が残っていた時代の話である。当時は家族間には勿論、来客にとっても相互交流に至極便利な生活環境があった。然し、農村社会が崩れて同一親戚の各地方への分散化、車の普及による訪問先での駐車場確保の困難性、運転者の振舞酒への辞退の問題、家事仕事の省力化を尊ぶ風潮、他人の来訪には不向きなプライバシー優先の生活形態と家屋の設計などが進行してゆくにつれて、他家へ訪問する事の躊躇いも生じている。嘗ての温もりのあった日本のこの風習は、スコットランドの first footing と同様に、次第に過去のものになろうとしている。いずれにせよ、新年を迎えるに当たって東西を通じて共通しているのは気心の知れた人々を中心として人々が相集い春を待つ心の一斉の表現を行うと云う事であったと思われる。

む す び

嘗てお正月の季節風景であった風揚げ、こま回し、羽子板を使つての羽根突き、獅子舞の巡業などを見たりする機会は今日の日本ではすっかり少なくなった。和服姿や日本髪を結って町を行き交う女性の数も次第に見かける事が珍しくなった。

玄関の扉の上の真ん中には真冬でも枝から落ちない「橙」着けた“しめ縄飾り”を未だ見かける事が多い。¹⁰⁾ これは自家用車前面の番号標示プレートの上あたりに結ばれる事で現代への応用化が図られて習慣の根強さを示してしている。民族の帰属意識を共有するシンボルであった日の丸の旗を門柱に掲げる習慣は、伝統の門松を立てる習慣と共に廃れる方向にあるようである。ところでロンドンアルバートホールのサマーコンサート The Proms の最終日には聴衆が英国国旗のユニオンジャックやイングランドの聖ジョージその他の民族旗を熱狂的に振り回し、愛国歌“英国よ、支配せよ Rule, Britannia”を高らかに合唱してコンサートを盛り上げている。そして最後には全員が総起立して national anthem である国王の長寿と国の栄光を謳った God save the Queen の大合唱を厳かに行う。一種の祭りとも云えるこのコンサートの情景を日本からの旅行者がその場で見たならば、このような形で一般の人々と国家・国旗との自然な結びつきを、果たしてどう感じるであろうか。

日本では三元日に親戚・知人の大勢が相集いお正月特有のゲームや“かるた”に興ずると云った光景も次第に過去のものになろうとしている。「金色夜叉」に登場する“かるた会”を引き合いに出す迄もなく、お正月の集いは男女別学の時代にあって親や世間の公認／黙認する若い男女の数少ないの出会いの場であり、そして春を呼ぶ場でもあった。私の幼い日の記憶を辿ってみる時、お正月の集いにおけるゲームの種類も実に多種多様であったように思える。そのゲームの一つであった“羅漢さんが揃ったら回そうじゃないか。えいやさ、ほいやさ”などは、果たして今日でも残っていて何処かで行われているのであろうか？

こうした嘗てのお正月を盛り上げていた諸々の遊びが祭りを演出する素材となっていた事を指摘したのは、その遊びを復元し、現在に機能させたいという思いから書き綴った訳ではない。又、グリムがドイツ各地に埋もれかけていた民話を掘り起こす事から新たに生み出した世界的な古典童話

とか、或いは、The Golden Bough の著者 J G Frazer とか、或いは、柳田国男といった大型の民族学の研究がそれらの素材に基づいて誕生・出現するのを期待している訳でもない。市町村教育委員会とか各地方の大学を含めた地元の研究教育機関のレベルによる地道で組織的な調査をした上で文書記録として郷土民俗資料館に残し、又、教育現場において郷土史教育の一環として、或いは民族文化の伝承の普及に役立つように積極的に後世に伝える施策を考えるべきではないだろうか。

数十年前、私は勤務地として広島県三原市で二年間を過ごした事がある。それ迄祭りと云えば温暖に恵まれた季節、春から秋にかけて行われるものと思っていた。それが2月の凍り付くような寒さの中で“神明市”が行われ、そこには植木市なども立ち並び人々で賑わっていた。小さく鉢植えの中に収まった樹木の緑とその日の寒さとのコントラスト、そして暦の上での立春が示す陽光の明るさと気温の冷たさとの不調和な実感を伴う2月の祭りがそこにはあった。それは間近に迫った本格的な暖かさを持つ春の到来の先触れであった。そして又、キリスト教国の新年とも云える クリスマスの時季に Xmas ツリーに寄せる人々の思いが、場所を変えて姿を現しているようでもあった。緑の枝への人間の本能的な慈しみは西欧ではキリスト教世界と云う現在の時を超え、遠く異教徒の時代に戻る。日本の場合も現存する習俗はそのルーツを仏教伝来、神仏習合以前の時へと呼び戻す。別々の歴史と文化を持つとされる東西が自然崇拜・多神教信仰の時代に時を戻して始めて互いに握手を可能とする事を実証しているようでもあった。

日本の祭りには京都の葵祭りのように古く源氏物語の中でその様子的一端が紹介されているものもある一方で、4月29日の呉みなと祭り、5月3日～5日まで広島市を飾るフラワーフェスティバル、そして同月、福山市で開かれるばら祭など歴史の浅いものもある。

世界の民族のるつぽ melting pot と云われるアメリカ合衆国ではあるが、現実にはヨーロッパ

各国から移住した先の土地で同じ民族集団を構成し、それぞれの移民グループがその祖国から持ち込んだ習俗をそのまま継承している場合が多い。或いはそれをリフォームを加えた形で行っている例も多い。ここでアメリカの新年を飾る祝祭行事ローズパレード、ローズボウルの場合を見てみたい。ローズパレードはカルフォニアの人々にとっては勿論のこと、全米の人々にとっても今や新年を告げる祭りである。それは建国以来、米国の地で新たに創生され、既に百年を超える伝統を持つ祭りである。この祭りはロサンゼルス郊外の小さな町パサディナ Pasadena で1890年の小さな出来事に端を発して生まれたものである。ある植物のハントクラブがバラの芳香を求めて新年早々にピクニックに出掛けた。ピクニック先では様々なゲームが行われた。やがてその種目はローマ時代の戦車競走を含む広範囲なものとなる。更に、フットボールが加わるようになりそれはカレッジボウルの全米の中の西部地区の決勝戦の場へと発展する。その試合の呼び込みキャンペーンの役割をも演ずる趣向を凝らした数多くの美しい花一杯を飾った山車 floral floats や marching bands そして乗馬チームなどが2時間にわたって全世界からの諸団体の参加を含めその行進を繰り広げている。毎年ボウル観戦は勿論の事、パレードにも多くの見物客を各地から集め、同時にテレビ放送を通して全米の茶の間の人々の耳目をテレビスクリーンに釘付けにしている。観光事業としても今や巨大産業に成長している。この祭りが何故多くの人々の吸引力を持つのであろうか。それは新年、花、そしてフットボール競技に興ずる若い選手の機敏な運動動作に漲る青春のエネルギーなどが春いっぱいを表現しているからであろう。

ローマ時代、花と園と春の女神 Flora は自然の恵みのすべてを具象化した存在であった。豊穡の女神フローラを讃えての祭り Floralia は花に事寄せて春と新しき生命をこの世に招来する祭事であった。イタリアの都市、フローレンス Florence の5月祭とは国際的に知られる毎年開かれる音楽祭の名称である。花フローラの街フロー

レンス、そしてすべての花開く5月の音楽祭という事がこのフェスティバルの儀式性、饗宴性を高めている。ローズパレードと Floralia との直接の関連はないが、人々の春や花への思いが何処かで繋がっているとも云えなくもない。モツアルトの曲として多くの人に馴染まれている「春へのあこがれ」の歌詞は堇の開花を春の訪れの象徴として用いて次のようになっている。

来ておくれ、なつかしい五月よ、来て樹々をふたたび緑にしておくれ、

そしてぼくのために、小川のほとりにかわいすみれを咲かせておくれ！

—中略—

ああ、気候がもっと穏やかになって外が緑になりさえしたら！

来ておくれ、五月よ、ぼくたち子供はお前が来るのをこんなに願っている！

—後略—

訳詞 西野茂雄

五月を飾る広島フラワーフェスティバルも福山ばら祭の演出方法が如何にもベニスやニースのカーニバル、或いは、ローズパレードなどからの借り物じみても、参加者すべてが季節の歓びと感動を表現しているから立派な祭りになるのである。

祭りや習俗の持つ伝統性の維持はその時代の価値観との狭間にあって常に揺れ動いてきた。今日世界の国際化 globalization の中で national identity をどう残してゆくか。祭りの中での[…liness][らしさ]の扱いの問題もある。北アイルランドのオレンジマンパレードにおけるように祭りの中で民族的な歴史とか特性、イギリスらしさ Englishness の表現を強調する事で嘗ての被植民者アイリッシュの民族感情を刺激して摩擦を招いている場合もある。そして又、女性らしさ、美しさ womanliness をアピールした祭りの女王、「ミス…祭り」の選出など好ましくないとしてフェミニストの立場からの批判もあり。今後に向けて望ましい祭りのあり方が模索されている今日である。

人間は与えられた自然界の秩序の中で、自然を敬い、自然を畏れ、自然の恵みに感謝をして季節

の節目に祭りを行ってきた。祭りは自然界の営みの中で人間が果たすべき役割を描いた抽象画でもある。西欧の人々が異教徒の時代に樹木崇拜を行っていたのを現代風に解釈すれば資源の保全と自然環境の保護を考えた祭政一致の顕れと見ることも出来よう。古代の人々は自然を神として敬い、供え物を捧げる。その際人間を生け贄としていた。

今日傲慢にも人間は自然を生け贄として要求している。とは何かの書物から得て記憶した言葉である。これは至言である。又、森の動物は自然の恵みには浴するが、資源を全てを食い尽くさない。それは自らの種の保存のための本能と云うか知恵を備えているのであろうと聞いた事がある。

日本の神社は境内に自然林を持つ伊勢神宮から、小さな木立を持つ村の鎮守の神社に至るまで、樹木に囲まれた自然環境の中にその聖域を定めている。都市化の中で今日の人間は確かに生活の周囲に緑を失っている。杜〔やしろ〕を取り巻く杜〔もり〕は EcoPaganism, つまり、時を越えてあるべき生態系のモデル、を今日の人間に示唆している云えよう。英語の temple に相当する独語は tempel である。辞書には“神聖な場所”の他に“公園などにある四阿”の意味も記されている。これは、その昔、森林の中に置かれていた神殿の意味の名残りでもあり、更に云えば、神殿・聖所とは元々は建物を指すのではなく自然の森林そのものであったのである。¹¹⁾ 嘗て樹木崇拜の祭儀を行った異教徒、古ゲルマンの末裔である今日のドイツ人は、首都ベルリンの中心地、6月17日通りを挟んで拵がる限りなく自然林に近い広大な面積の緑地帯、その昔は選帝侯の狩猟場であった Grosser Tiergarten を、今日も昔のままの姿で残している。現在ベルリン市内の40%の面積を河川、湖沼、森林が占めていると云われる。都心からごく僅かな距離の場所に美しい湖 Wannsee を残している。それは首都にあって富士、山中湖よりも遙かに自然のままの景観を静かな憩いの場としてベルリン市民に提供している。今日ドイツが環境保護の先進国と云われるのは決して故なき事ではないのだ。

文明化、平均的画一化、唯物主義、科学合理主義と経済優先主義の提携、需要と供給そして研究の名の下に生命原理の弄びが行われたり、或いは地球の資源を無尽蔵と信じて開発？し、生態系を利己的に破壊してまでも資源を食い潰そうとする欲望の権化 exploitation が今日の人間だと云えなくもない。ここで時を振り返って祭りの根元的な意味を今一度考える事も必要なのではあるまいか。

注

- 1) 広瀬秀雄氏は「暦」東京堂出版の中で日曜が弘法大師によって輸入されたとの項を設け、日本に七曜が入ったのは明治以降ではなくイラン中国を經由して弘法大師によって持ち運ばれた事、日曜日はイラン語のミールの音訳「密」であった事などを述べている。
- 2) 動詞の springen は英語の jump の意味を表す。湧き水、井戸、泉を表す類似語に Brunnen がある。Am Brunnen or den Tore da steht ein Lindenbaum で始まる歌曲「菩提樹」の歌詞は日本の音楽教科書などを通して親しまれている。又ウイーンにある旧ハプスブルグ家の宮殿シェーンブルン“美しい泉”は彼の地に出かけた日本人旅行者の多くがその名を記憶に留めている。
- 3) winter は英語式の発音語ウインターとしては勿論の事、独語の発音によるヴィンターもシューベルトの歌曲集「冬の旅」Winterreise などを通して日本人に親しまれている。
- 4) フランス共和国暦は革命後改正され、1793年に実施された。十進法を時の単位として出来上がっており合理的な面もあったが、これは国民の間でも定着せず又国際的にも広がりを見せなかった。僅か13年でナポレオンによって廃止されている。
- 5) 仏語の bon (good)-fire の意味であるとする説もある。
- 6) Gunpowder Plot は1933年、ナチスドイツが政権を掌握した直後に起こった国会議事堂の焼失事件と同様に、真相について曖昧な部分を残してい

ると指摘されている。

- 7) ちなみにローマカトリック教の本拠地のあるイタリアでの土曜日はユダヤ教の安息日の意味である *sabato* となっているのは注目に値する。
- 8) 京都府の北部地方ではとんどの残り灰を家の周囲に撒布し火難除けとする習俗が今日でも残っている。
- 9) 現在では王冠の上の灯火は蠟燭から電球に変わっている。
- 10) 橙が太陽の象徴とする説もある。
- 11) *The Golden Bough* J G Frazer Macmillan P.145, *Roman Britain* Peter Salway Oxford Paper backs PP.672~673

参 考 文 献

- 洋書 1 *A history of Pagan Europe*, by Pridence Jones & Nigel Pennick, Routledge
- 2 *The Celtic Year*, Shirley Toulson, Element
3. *Holiday Symbols*, Sue Ellen Thompson, Omnigraphics, Inc.
- 4 *The Station of the Sun*, Ronald Hutton, Oxford University Press
- 和書 1 森が語るドイツの歴史, カールハーゼル／山県光晶, 築地書館
- 2 カトリックの文化史, 谷泰, NHKブックス
- 3 森を守る文明 森を支配する文明, 安田喜憲, PHP新書